THE DAILY NEWS
KOBE 2024 PARA ATHLETICS WORLD CHAMPIONSHIPS
Sat 18 May
DAY 2
Japanese

Yesterday's Highlight

大会初日から世界記録ラッシュ

コロナ禍により2度もの延期を経て、ついに開幕した神戸2024世界パラ陸上競技選手権大会。今年は8月にパリパラリンピックが開催される。パラリンピックと同年に世界選手権が行われるのは、初めてのことである。約100日後にパラリンピックを控えた今大会では、世界各国のトップ選手が、すでに上々の仕上がり具体を披露する場となっている。T11男子5000m、T72男子100mなどで世界新記録が誕生。競技初日から、過去のメダリストや世界記録保持者らがその実力を見せつけた。

■T11男子5000m

大会開幕早々に、世界新記録が誕生した。T11 男子5000m決勝で東京パラリンピック金メダルのエリツィン・ジャッキス（ブラジル）が従来の記録を1秒42上回る14分53秒97の世界新記録をマークした会心のレースに、「結果にはとても満足している。東京に続き神戸でも2つ目の金を獲得でき、日本でまた、いい思い出ができた」と声を弾ませたジャッキスの記録は大会新記録でもあった。

T11はガイドと走る全盲のクラスで、このレースには9組のペアが出場。号砲とともにトップにたったのは、ジャッキスと同じブラジルのジュリオ・セザール・アグリピーノ・ドス・サントス。ジャッキスは逆に最後尾につけたが、1000mを越える頃から少しずつ順位を上げ、ガイドの交替を機に明らかにギアが切り替わった。トラック外側から一気にトップに立ってもスピードはそのまま、2位に入ったアグリピーノ・ドス・サントスに4秒近い差をつけてフィニッシュラインを駆け抜けた。

「事前にガイド二人と打ちあせたプラン通りのレースができた。前半のガイドにはマイペースを保ってよい位置をキープしてもらい、ガイドが変わったら、ペースアップして追い抜くという戦略を立てていた」

得意な種目は800mや1500mの中距離でスピードには自信がある。「5000mは前半を抑えて体力を温存し、後半に仕掛けるレースが自分のスタイル」と手応えを語った。
今夏に迫るパリパラリンピックでは連覇がかかるが、「日本の唐澤（剣也）選手や和田（伸也）選手や、ケニアや同じブラジルにもいいライバルがいる。よい友人たちでもあるので、切磋琢磨していいレースができれば」と力を込めた。

名前の挙がった唐澤は連覇を狙ったが、15分3秒25で3位だった。スタートから積極的に走り、アグリピーノ・ドス・サントスに食らいつく位置でレースを進めたが、及ばなかった。終盤、4位に落ちたが、持ち味の粘りと客席からの大声援を力に一人抜き、表彰台は死守した。

「金メダルを目標にしていたので悔しい。地元の群馬県から大勢が応援にきてくれたので皆で喜びたかったが、残念。昨年のパリ大会で金をとり、自分自身、正直油断があったと思う。今大会で世界記録を更新され3位に終わったので、ここで気を引き締めて、悔しさをバネにパリでは金を取りたい」

■T72男子100m

T72は前回2023年パリ大会で新設されたクラスで、重度の脳原性まひの選手を対象とし、競技用の3輪フレームを使って走る。5選手が出場した男子はカルロ・ファビオ・マルチェッロ・カルカニ（イタリア）がスタートから鋭い飛び出しを見せ、自身の世界記録を0秒41更新する快走で金メダルを獲得した。

「とても嬉しい」と発すると喜びの涙で声を詰まらせた。「とても幸せだ。私は神経障害を伴う重い疾患があるが、3年前にフレームランニングと出合い、再び『走れる』ようになって生きる希望がわいた。希望を持ち、決してあきらめず戦い続けることがとても重要なんだ」とうなずき、「子どもたちなど観客席の声援がとても力になった」と感謝した。

■F41女子砲丸投げ

F41女子砲丸投げは世界選手権やパラリンピックで勝利を重ねる「絶対王者」のラオーア・トリリ（チュニジア）が連覇を果たした。1投目から9m93をマークしてトップに立つと、6投目に今季ベストの10m15を投げてダメ押しし、金メダルをつかんだ。

「チュニジアの金メダル第1号になれたので、とても嬉しい。練習してきた成果が出せたし、記録もよく、とても幸せ」と笑顔を輝かせ、「22日の円盤投げでもがんばりたい」。今夏に控えるパリパラリンピックでの二冠連覇に向けても好発進となった。

■F32女子こん棒投げ

イブニングセッションのハイライトは17時に始まったF32女子こん棒投げだ。今大会には、2019年ドバイ大会で優勝したチュニジアのマルーア・イブラハミをはじめ12名が出場した。

投てき台を使用するため、選手は一人ずつ連続で６投する。9番目に出場したブラジルのジョバンナ・ボスコロ・カスティーリョ・ゴンサルベスが6投目にマークした24m35でトップにつけたが、その後、11番目に出場した同じくブラジルのワンナ・ヘレナ・ブリトー・オリベイラが大会記録となる26m66で逆転。試技順最後のイブラハミが５投目で26m60とオリベイラに追いすがるも、６投目で記録を下げオリベイラが優勝した。イブラハミとオリベイラとの一騎打ちの戦いに、最後まで残っていた観客からは大きな拍手が送られた。

優勝したオリベイラは2022年に競技を始めたばかりの27歳。昨年行われたパリ大会で５位入賞。「世界にはまだまだ私より強い選手がいる。もっと努力しなくてはと思う。でも、優勝を神様に感謝したい」と、涙を浮かべて語った。銅メダルを獲得した22歳のゴンサルベスは、今大会が国際大会としては初出場。「オリベイラ選手とはブラジル代表の仲間として支え合っています」と仲良く語ってくれた。

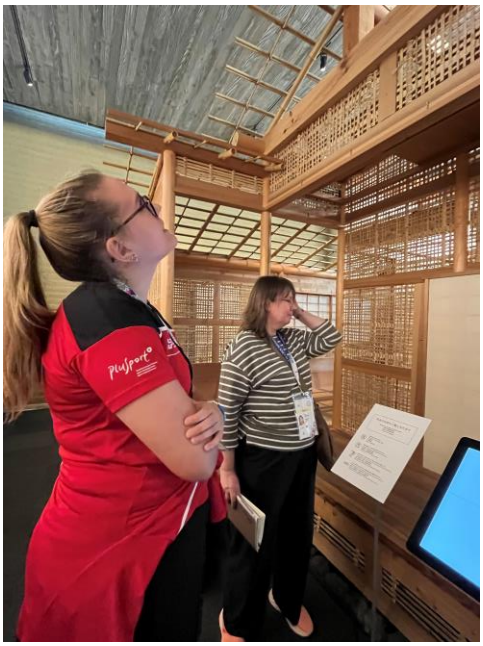
Competition Schedule and Results

GO KOBE 2024!

神戸の魅力を満喫！

「神戸2024世界パラ陸上選手権大会」のため海外 から訪れた報道陣を対象に、神戸の歴史や文化に触れ、名物料理を楽しむメディアツアーが大会開幕前日の5月16日に実施され、ドイツ、イタリア、スイス、ポーランドのジャーナリストやフォトグラファーたちが参加した。神戸市観光局が企画した。

一行が最初に向かったのは、新神戸駅至近の「竹中大工道具館」。日本で唯一の大工道具の博物館で、民族遺産として収集・保存した大工道具を7つのコーナーに分けて展示している。日本の伝統的
な大工道具の歴史や種類などから、使いこなしてきた大工たちの技術やものづくりにかける思いまでを感じることができる。



祖父が大工だったというドイツのフォトグラファーは展示品一つひとつを興味深そうに見学。丹念に手入れをされた鉋と並んで展示されていた鉋くずを手にし、「向こうが透けて見えるほど薄くて、すごい。最初にき
ちんと計画してから、そこに向かって精密に作り上げる日本人の文化は素晴らしい」と感心していた。

つづいて、一行が向かったのは、銘酒の産地として名高い神戸・灘地区にある「菊正宗酒造記念館」。菊正宗は江戸時代中期（1659年）から酒造りを始め、360年以上の歴史を誇る酒蔵だ。

酒だけでなく、酒の貯蔵に使う「樽」も自ら造っていることも特徴で、一行は「樽酒マイスターファクトリー」で職人が実際に樽を作る様子を見学し、江戸時代から受け継がれる製樽の高い職人技を目の当たりにした。仕上げの工程で使う鉋は市販の鉋を職人自らが再加工した「特製」だという。「竹中大工道具館」で目にした大工の道具にこだわる姿勢などが思い出された。

製樽見学後は銘酒「樽酒」などの試飲コーナーへ。少し甘みのある「生原酒」を口にしたイタリア人ジャーナリストは、「イタリア南部の食後に飲むワインの味に似ている」と目を細めながら飲み干し、「灘の酒」を堪能した。

さらに、新神戸駅から徒歩でアクセスできる「日本三大神滝」の一つとされる名瀑、「布引の滝」へ向かった。「布引の滝」は高さ43mの雄滝(おんたき)をはじめ、雌滝(めんたき)、夫婦滝(めおとだき)、鼓ヶ滝(つつみがだき)の4つの滝の総称。最も上流にある雄滝までで15分ほどのハイキングがたのしめる。5月の新緑とさわやかな空気のなか、翌日から始まる大会取材を前に英気を養った。

ツアーの最後は神戸の繁華街、三宮にある「ビフテキのカワムラ」へ。客の目の前で繰り広げられるシェフの華麗な手さばきで、最高に美味な状態に焼き上げられた最高級の神戸牛コースが供される。ポーランドのジャーナリストは、「まるでショーのような素晴らしいパフォーマンス。お肉も柔らかくて、本当においしい」と話し、「充実のツアーだった。参加してよかった」と笑顔で振り返った。